

書評

Andreas Pehnke (hrsg.u.erl.): *Die literarische Werkausgabe des Hamburger Friedenspädagogen Wilhelm Lamszus (1881-1965)*.
Beucha・Markkleeberg (Sax-Verlag) 2016

畔上 泰治

1. 『武器を置け!』(1889年)などで知られ、1905年にノーベル平和賞を受賞したベルタ・フォン・ズットナーは、20世紀には人類は戦争という合法的な殺戮制度を廃絶しているであろうと期待を込めた発言をしている。この発言は19世紀末のものであるが、その後人類は二度にわたる世界大戦を経験して21世紀を迎え、今なお戦争を続けている。ドイツでは、人類が最初に体験した大規模な戦争、すなわち第一次世界大戦の高揚したナショナリズムの高まりの中で、少年層に向けて一冊の小説が発表された。『人間屠殺場』(Das Menschenschlachthaus, 1912)と題されたこの小説は、大量殺戮兵器の登場により、「近づきつつある戦争」が人類史上で類を見ない惨事をもたらすことを預言的に描き出した短編小説で、作者はハンブルクの小学校教員ヴィルヘルム・ラムスツス(1881-1965)である。

ヴィルヘルム・ラムスツスは、ナポレオン3世が率いるフランスとの普仏戦争で勝利して帝国を築いたドイツにまだ戦勝ムードが残っていた1881年に、靴職人の子として生まれた。父親は普仏戦争に動員されたがノイローゼとなり復員し、その後は社会民主党を積極的に支持して活動していた。ヴィルヘルムは長じて小学校の教員になるが、その教育的実践の根幹には「改革教育学」(Reformpädagogik)の理念があった。「上からの」押しつけ的な教育に代わる、「子ども本位の」(„vom Kinde aus“)教育を目指すこの理念は、個別の教科の中での実践を超えて、学校の運営や児童を取り巻く家庭・社会環境の改善までも広く活動の射程に入れていた。ヴィルヘルム・ラムスツスは国語教育の中でも作文を通じた教育に力を入れ、児童の想像性と主体性を育む教育を実践していた。『人間屠殺場』は、統一国家を建設したドイツが近代化の遅れを挽回すべく、国民意識を形成しつつ拡張政策を推進していた時代の社会的風潮に対抗する作品で、その根底にはラムスツスのこの教育理念があった。

2. ドイツのグライフスヴァルト大学教授で教育学を専門とするアンドレーアス・エックハルト・ペーンケ(1957年生)は、ラムスツスの文学的活動の意義と影響に関する論考も添えて、彼の作品を一冊の本に纏め上げた。それが上記の書である。ペーンケが人類の未来に対する使命感ともいえる情熱を込めて編纂したこの大著の意義を理解するには、ラムスツスの主著『人間屠殺場』を見ておくことが近道である。『人間屠殺場』の中でラムスツスが描いたのは、国益のためには戦争という殺戮をも正当化する「上からの」教育への疑問と、近代化した戦争の凄惨な姿であった。この小説は戦争が布告され、主人公が動員される場面から始まる。そこには統一国家を建設して間もないドイツが、国際社会へ進出するために国民意識の形成に力を注いでいた時代の社会風潮も描かれている。できたばかりの歴史の浅い国では、人々には「国」を愛するというものの具体性は見え難いものであった。こうした中で利用されたのは、「ドイツ」人にとっての共通の「敵」を作り上げ、その敵を打倒するために一丸となって尽力すると

いう道徳観の賛美であった。ドイツの拡張を妨げる敵を取り除くための軍事教練では、敵の姿を明確に意識させ、銃の引き金を引くことが正当であることを十分に頭の中に刷り込ませることに力が注がれた。ラムスツスはこの小説の中で、「敵？敵とは何だ」と自問する主人公の内面を描き出し、それを通して軍事教練で繰り返される洗脳行為の非人間性を訴えている。招集されて故郷を離れる場面では、馱でフランス人家族の別れの姿を目にした主人公は、宿敵フランス人も「泣くことがあるのだ。僕たちと全く同じだ。彼らも別れるときには泣き、そして愛し合い、痛みを感じるんだ」と、あらためて「敵」も人間であることに気づく。「敵」として、非人間的な存在物として位置付けられていた国民が、自分と同じように別れの辛さや痛み、喜びを感じる一人の人間であることに気づくというこの認識こそ、戦争を回避する重要な過程であることをラムスツスは示している。換言すれば、戦争の回避には、人々が思考停止の状態を破り、人間としての想像力を働かせて、プロパガンダによって作り上げられた「敵」も同じ人間であることに思いを馳せることが重要であるとラムスツスは指摘する。

「近づきつつある戦争の姿」との副題を持つこの小説は、これから始まろうとしている戦争では、一後に第一次世界大戦と呼ばれる戦争では、近代化された兵器が投入されようとする中で、兵士は人間を殺す職人となり、大量に引き起こされる戦場での死にはもはや尊厳はなく、遺体もまた重機で掘られた穴に投げ込まれる「機械仕掛けの死」が待ち構えていることを預言している。スーザン・ソントグは『他者の苦痛へのまなざし』の中で、現代の情報化社会では情報の過剰性がもたらす自己防衛手段としての「感情移入の不足」が生じていると指摘している。あまりに残酷で悲惨な映像が氾濫し、日々これらに接していると、人間は無意識のうちに他者の痛みに対して目を閉じ、思考することを止め、自分を安全な場所に置こうとする。湾岸戦争時に映し出されたピンポイント爆撃などに見て取れるように、現代の戦争では無人攻撃機の投入等、最新技術が組み込まれた兵器の利用によって、ボタン一つを押すことで目的を達する「クリーンな戦争」のイメージが強調されている。テレビに映し出された戦争の姿を多くの人々がスベクタクルを見るかのように観客席から眺めていた。そこでは物的な破壊が強調され、苦しむ「敵の顔」は背後に押しやられていた。ラムスツスがこの作品の中で描いたのは、現代のハイテク技術や軍用ロボットが登場する一世紀前の時代の、飛行機や戦車、毒ガスなどが大きな役割を果たす戦争が近づきつつある時代の状況であった。招集を受けて主人公が故郷を離れる場面、軍事教練、戦場での交戦場面において描かれているのは、戦場で負傷し、命を落とす人々を目の前にして、国の論理で動員され、戦争という大義の中で正当化された殺戮行為の意味を問い、苦悩する主人公の姿である。

『人間屠殺場』は3か月で10万部を超える売り上げを記録した。この作品はその後多くの国で翻訳され、作者ラムスツスの名前は国際的に知られるようになった。ドイツ語版では、後にノーベル平和賞を受賞するカール・フォン・オシエツキーが、またフランス語版では、クラレテ運動の指導者で『砲火』の作者でもあるアンリ・バルビュスが序文を寄せている。日本でも、佐藤緑葉がウイルヘルム・ラムスツス『人間屠殺所』（泰平館書店 1914年）として訳出している。

こうして『人間屠殺場』によってその名前を知られるようになったラムスツスは、第一次世界大戦が始まると、祖国への忠誠心と愛国心が欠如した、教育者としての適格性を欠く者とし

て、軍司令部から停職処分を言い渡されている。この処分は、この小説を自分でも読んだハンブルク学校教育担当参事官の判断によって3日後に取り消されたが、ラムスツスはその後教育現場を離れ、北アフリカにおけるドイツ兵の活動の視察を命じられている。

3. ラムスツスが『人間屠殺場』で警告した、近代化した大規模な戦争は第一次世界大戦として現実のものとなり、その被害は彼がこの小説の中で描いた状況をも大きく超えていた。第一次世界大戦後ラムスツスは戦争の廃絶に向け、積極的に活動した。それは『人間屠殺場』の第二部として構想されていた『精神病院』(Das Irrenhaus, 1919)や戯曲『毒ガス』(Giftgas, 1925年)、詩集『屍の丘』(Der Leichenhügel, 1921)などの文学活動にとどまらなかった。短期間ではあったがラムスツスはドイツ共産党(KPD)に所属し、政治活動を通して戦争廃絶を訴えている。ヒトラー政権下ではラムスツスは執筆を禁止され、また作品発表の機会も奪われたが、この時期には彼は作品の構想を書き溜め、あるいはまたペンネームを使い新聞等に寄稿していた。戦後に発表されたアンソロジー『大いなる死の舞踏』(Der große Totentanz, 1946年)に含まれた小編『研究者と死』(Der Forscher und der Tod)は、大企業から資金を得て研究を遂行し、完成させながらも、その成果が悪用され人類に多大な被害をもたらす可能性を思い悩み、研究成果の公表を控えるべきかと苦悶する大学教授の姿を描いている。この作品は、毒ガスや原子爆弾などが開発され、戦争に投入された現実を目にしたラムスツスが、科学者の社会的責任というテーマを扱う小品となっている。

4. ベルタ・フォン・ズットナー財団、ハンブルク学校史研究振興会、グライフスヴァルト大学 W.ラムスツス研究室などの支援により出版された、748頁のこの大著『ハンブルク平和教育者ヴィルヘルム・ラムスツス文学作品集(1881-1965)』では、編者ペーンケはラムスツスの生涯とその活動を、ラムスツスが警告した二つの世界大戦を軸に区分し、二つの戦争の前後におけるラムスツスの活動を記し、同時にその時代に書かれた彼の作品を掲載している。本書は、1章「幼年時代、学校時代、最初の(改革)教育の実践ならびにヴィルヘルム期ドイツにおける作家デビュー」、2章「第一次世界大戦の警告：ラムスツスの主著『人間屠殺場』、その続編ならびに外人部隊短編作品」、3章「『人間屠殺場』が第一次世界大戦として現実となる」、4章「第二次世界大戦の警告：ヴァイマル共和国時代の平和・改革教育活動」、5章「ナチ時代の国内亡命」、6章「第三次そして最後の世界大戦、核地獄の警告－戦後期の東西対話の中で」、7章「付録：『人間屠殺場』－反戦映画プロジェクトのシナリオ草稿」、8章「生涯年表」、9章「注」、10章「人物索引」から成り、年表や注、索引を除く各章ではラムスツスの当該の時代における文学的な活動を纏め、またそれぞれの作品の背景や意義、反響などを集大成している。第9章の注や第10章の索引は詳細を極め、そこには世界各国のラムスツス関連資料を渉猟し、長年にわたりラムスツスを精力的に研究してきた編者ペーンケ教授の強靱な探求心と情熱を読み取ることができる。

幸運にも日本はここ70年以上にわたり戦争を直接経験することはなかった。その中で、遠い地域で繰り返されている戦争は画面を通して消費され、戦場で苦しむ人々の痛みへの共感も封印されがちである。すでに一世紀以上前に、近代化した大量殺戮兵器を投入して交わされる

戦争が招く惨事と、武器への科学技術の転用を警告したヴィルヘルム・ラムスツスの活動を詳細に纏めたペーンケ教授のこの大著は、企業の資金を活用して先端技術の研究開発に取り組もうとする大学と、その成果を活用し、最先端機器の開発と販路拡大を目指す産業界との間の共同研究が推奨されている現代の日本においても、科学者の社会的倫理というテーマを思考し続けている人々に対して、貴重な資料を与える一冊となろう。